

## 校内適応教室を活用した不登校の未然防止と早期復帰について

### 不登校児童・生徒の状況

対象生徒は令和 5 年 8 月現在 32 名で、コミュニケーションがうまく取れないことや精神的疾患、学業不振など、本人にかかる要因で不登校となる生徒が多い。家庭環境が不安定で保護者の目が行き届かずに欠席が増える生徒もいる。今年度から校内適応教室を開設し学びの機会の確保や友達との絆づくりを行っている。

### 具体的な取組

今年度から校内適応教室アザレアルームを開設し、学校内に生徒の居場所をつくり、不登校の未然防止と早期復帰に向けて取り組んでいる。

地域の方から生け花体験学習を受け、芸術を通して登校意欲を高めている。



登校支援会議を週に 1 回実施することで、各学年の不登校傾向の生徒情報を共有、S C の助言を受け個に応じた支援策や家庭との連携について協議している。保護者へのカウンセリングを積極的に進め、学校と家庭との連携強化に努め、未然防止と早期復帰、新規不登校者数の減少に取り組んでいる。

体育祭や文化祭、学年行事などを通して生徒同士による絆づくりに取り組んでいる。教育活動の充実を図り、生徒が活躍する魅力ある学校づくりを推進する。



近隣の小学校との連携を強化し児童・生徒情報の共有に努めている。不登校傾向のある児童については、入学前に保護者との面談を行い登校しやすい環境を整備し、個に応じた活躍の場や安心して過ごせる環境づくりを行っている。

各学期の始まりに生徒一人一人との面談を行い、不安や悩みなどを聞き取り、不登校の未然防止に努めている。

### 成果

不登校の未然防止と早期復帰のために週 1 回の登校支援会議や学期ごとに開催する不登校校内研修を実施している。学校が魅力的であるために教職員による生徒の居場所づくり、生徒自身による絆づくりを意識し、魅力ある教育活動の充実を目指す。

### 課題

休み明けの生活リズムの整え方などを伝え、不登校生徒の増加を抑える。学校の魅力を伝え、不登校の未然防止と早期復帰に努める。

## 校内適応教室について

### 不登校児童・生徒の状況

- ・当該生徒は、学校での居場所があれば登校できるようになることが確認できた。
- ・デジタル機器を活用して不登校生徒の登校支援ができた。
- ・学校支援員との人間関係の構築が登校継続に繋がった。

### 具体的な取組

- ・個別学習スペースの確保
- ・オンライン学習に対応
- ・自学自習に対応



不登校生徒だった 3 年生は、校内適応教室に毎日登校し、高校受験に向け個別指導を受けている。



居場所づくり、絆づくりとして、カードで遊んだり塗り絵をしたりリラックスして滞在できる空間となっている。



安心して過ごせる空間となるよう、入り口には衝立を置き教室内は暖色で統一して明るい空間を演出している。



### 成果

不登校加配教員の配置により、校内別室教室の順調な教室運営に多大に貢献した。

その結果、3 年生では 2 名、2 年生では 11 名、1 年生では 2 名の生徒が利用して登校を継続している。特に 3 年生は進路決定に向け励んで大きな成果である。

### 課題

校内別室教室の利用者の増加に伴い、学習スペースの確保が課題である。

## 生徒の生活の場・学びの場を大切にする取組について

### 不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、入学後から登校しづりがあり、ある時期から不登校となった。不登校の要因は、対人コミュニケーション能力の不足と学力不振であると考えられる。現在は別室に登校し、課題の解決を目指しながら教室復帰へ向け歩んでいる。

### 具体的な取組

#### 居場所づくり・絆づくり（安心した生活）

「わくわくお話ウィーク」を2学期開始の一週間の間で実施し、生徒本人が話を聞いてほしいと思う教員を希望して15分の面談を行う。宿泊行事では、行事中のルールやお小遣いの額、活動先で食べるお弁当の内容などを、実行委員会の生徒が自主的に決める。

#### 魅力ある授業づくり（出現率減少）

生徒の興味・関心や理解を深めることを第一に考え、外部人材を活用した特別授業を実践した。30件を超える特別授業では、新たな時代に必要な感性を養うことを目的に、専門家による講話や指導を通じて生徒の学びを深めた。



#### 生活支援員の配置（校内体制の強化）

東京都不登校児童・生徒支援調査事業予算を活用して雇用した「学校生活支援員」を校内適応指導教室に配置。支援員の配置により、生徒に寄り添う指導が充実し、また教職員の時間的なゆとりを生み出すことで、組織的・意図的な個別支援が可能となった。



#### 生徒状況を視覚的に把握（i-check 活用）

葛飾区の事業の一環である東京書籍の「i-check」を導入し学級風土の見える化に取り組む。学級の課題はレーダーチャート等のデータから、また散布図からは要支援の生徒を読み取ることができる。データを分析し生徒観察やSCとの連携強化を図る。

### 成果

- (1)全教職員で不登校生徒を支える校内体制が再構築された。
- (2)教員が生徒個々の特性に合わせて生徒とつながろうとする意識が向上した。
- (3)不登校生徒における昨年度からの教室復帰率 20%（25名中5名）。

### 課題

- (1)i-checkの分析結果を踏まえた、生徒支援の在り方の検証・実践。
- (2)全クラスが全国平均以下の項目「友達の支え」を居場所づくり・絆づくり等の取組を意図的・組織的に行い、第2回 i-checkの結果で6クラス中4クラス以上を目指す。

## 不登校の未然防止と個々にあった目標設定

### 不登校児童・生徒の状況

対象となる生徒は、家庭環境に課題を抱えているケースが増加傾向にある。そのため、保護者へと生徒へのアプローチについて役割を分担し、担任をはじめとして SC や SSW、子ども総合センター等と連携して対応している。学校外で過ごすことの多い生徒には、別室登校やタブレットを使った学習で対応している。

### 具体的な取組

#### ○レジリエンス教育

精神的ダメージを受けた時に、生徒自身が諦めずに立ち上がれる力を身に付けられるように、教員一人一人がレジリエンスに関わる研究をして実践している。

#### ○「先生と話をする会」

夏休み最終週の登校日に、全校生徒が先生と面談する。夏休みをどう過ごしたか、2 学期に向けて心配事はないかなど、面談しながら生徒の緊張を解いている。

#### ○支援会議と関係機関との連携

週 1 回、各学年の担当が対応を協議し、学校だけでなく子ども総合センターや SSW と連携して生徒と保護者の困り感への対応を協議している。不登校の原因ばかりにとらわれず、対象生徒の状況に着目し、その生徒にあった課題を設定できるようにしている。

#### ○オンライン PDCA シート

計画的に学校外で学習している生徒は、週の予定と毎日の生活の記録について、タブレットにある「PDCA シート」に入力している。そこで生徒の学習と生活状況を確認し、基準を満たした場合は、隔週の学習カウンセリングと支援会議を経て出席と認定するなど対応している。

### 成果

クラスごとのレジリエンスレベルを測ることができた。また、生徒に応じた課題を設定し、状況に応じて週 1 回の別室登校など対応できている。

### 課題

自分から行動していく生徒を育成していきたい。引き続きレジリエンス教育で不登校の未然防止、失敗を恐れない雰囲気作りをしていく。

## 校内の不登校支援体制の基盤づくりについて

### 不登校児童・生徒の状況

本校では、各学年の不登校生徒数が多く、不登校に至る要因や背景は多様である。生活リズムの乱れ、集団になじむことができない、登校前の体調不良、起立性調節障害、無気力などが要因として挙げられる。校内委員会を通じて、学級担任が保護者や生徒と連絡を取ることで、適応指導教室やフリースクールに通う生徒も増えている。

### 具体的な取組

#### 組織力の向上

魅力ある学校づくりとして、小中一貫教育校の特色を生かしながら、生徒会を中心に小中合同で挨拶運動に取り組んだ。また、4月に別室対応の環境整備を行い、5月に運営を開始した。

別室対応の利用状況に関しては校内の全教職員が職員室で把握できるようになっている。



#### 校内体制の強化

学級担任が作成した生徒支援シートやSCの情報を基に、登校支援会議を定期的に行き、不登校生徒のアセスメントを行っている。また、支援の方向性をチームで共有している。さらに、不登校担当教員を中心に、巡回心理士による教員の研修会を行い、不登校の要因について共通の理解を図った。

#### 個々の不登校生徒への支援

更新された生徒支援シートの情報を活用しながら、学級担任と連携して不登校生徒に別室対応利用の声掛けを行い、不登校生徒の支援の拡大に努めた。

SCと連携して、不登校生徒の保護者に対してSCや保護者同士で話ができる機会を設定した（今後も継続予定である）。

#### 不登校加配教員連絡協議会の参加

葛飾区不登校児童・生徒支援スタンダードと加配教員連絡協議会で得た成果を生かして、自校の不登校生徒支援ガイドラインを作成した。このガイドラインを基に教職員が共通認識をもち、不登校生徒への細やかな支援を行っている。

### 成果

定期的な支援会議やガイドラインの提示、研修会の開催などにより、校内の組織力を上げ、学校全体として不登校生徒に対する支援を行うことができた。また、別室対応の環境（サポート教室）を整備したことで、利用する生徒も増えてきている。

### 課題

本校では別室対応専任職員が不在のため、全日の別室対応が難しい。今後は教職員による別室対応について運営方法の改善を図る。

## 本校の不登校対応について

### 不登校児童・生徒の状況

本人の発達特性や対人関係、学習面や家庭環境など、不登校になる背景は様々であり、複数抱えていることも多く、関係機関と連携しながら対応している。また、外に出ること自体が難しい生徒から、登校はできているが教室にはあまり行けない生徒もおり、生徒によって不登校の状態が異なっている。



### 具体的な取組

#### 校内適応教室

校内委員会で利用が適切か検討し、事前に面談を行って、本人・保護者と利用の目的を確認している。校内適応教室では、自学自習、ゲーム、塗り絵などの活動を行い、心身の休息をさせる。生徒の様子を見て参加できそうな授業から参加をさせ、教室復帰のための自信をつけさせていく。

#### 未然防止・早期対応のための会議

不登校傾向の生徒を対象としたケース会議を定期的に行っている。学年教員とスクールカウンセラー、養護教諭（特支コーディネーター）が参加し、現在の課題や背景・要因を整理している。支援の具体的な内容を検討・共有し、早期に支援を開始することで不登校の未然防止を図っている。

#### 多様性を認める道徳・人権教育

「みんなちがってみんないい」をスローガンに、一人一人学びのスピードや方法は異なること、心のエネルギーを満たすために休息が必要な人もいることなどを全校生徒に伝えている。また、校内適応教室について学校だよりで知らせ、保護者・地域にも理解を促している。

#### 教え合い・学び合いを中心とする授業

構成的グループエンカウンターを様々な機会に実施している。4月には全校でエンカウンターを行い、生徒会を中心とした全校での活動も行っている。各教科では、話し合い活動を積極的に取り入れ、仲間同士で協力して教え合い、学び合うことを学校全体として大切にしている。

### 成果

校内適応教室の存在を全校生徒に知らせることで、一人一人の違いを認め合い、どのような生徒も受け入れる温かい雰囲気が育まれた。そのため、教室復帰のハードルが下がり、校内適応教室の利用をきっかけに、登校できる生徒が増えた。

### 課題

背景要因が複雑な生徒が増え、一人一人にきめ細やかに対応することが難しく、対応する教員の負担が大きくなっている。

## 不登校を生まない取組と校内適応教室について

### 不登校児童・生徒の状況

当該生徒は中学 3 年生で、中学 1 年生の 2 学期途中から不登校状態が継続している。保護者は勤務の都合で、日中の当該生徒への登校支援が難しく、不登校状態になっている。その後は教室復帰することに対して、友人の目が気になるなどの理由でハードルが高くなってしまった。

### 具体的な取組

#### 不登校マニュアルの共有

年度当初に校内における不登校マニュアルを示し、全教職員が同じ認識で不登校対応を行えるようにしている。不登校対応については初期対応が大切になってくるため、電話連絡や家庭訪問など、担任を中心とした継続的な対応を行えるようにしている。

#### 会議資料と校内のデータ集約

校内の教育相談委員会を週 1 回実施し、生徒情報の共有を行っている。月に 1 度校内オリジナルの会議資料を基に、アセスメントや今後の方針を協議すると同時に、数値による不登校状況の「見える化」を行い、全教職員が、校内の状況を把握できるようにしている。

#### 不登校を生まないための取組

- ①教室環境のユニバーサルデザイン化  
全教室にて、前方に掲示物を張らないなど、教室での刺激を少なくし、学習に取り組みやすいようにしている。
- ②行事における認め合い活動  
行事が終わった後には、生活班で班員の行事で頑張った姿を認め合い、伝えあう活動をしている。

#### 校内での学習への指導教室の取組

週 5 日支援員が出勤し、9 時～15 時までの間、別室登校をしている。午前は、個人学習。午後は SST を行っている。



### 成果

R3 年度から R5 年度までの本校の不登校状況調査において登校できるようになった生徒は、  
R3 年度：2 人 R4 年度：4 人 R5 年度：5 人と復帰数が上がっている。  
新規発生率は R4 年度：3.4% R5 年度 1.8%と減少している。(R5 年度は 9 月末時点)

### 課題

- ・依然として不登校の生徒が多く、対応していく生徒の数が多。
- ・保護者の意向で外部機関につながる事が難しいケースもある。

## 不登校傾向の早期発見と校内適応教室について

### 不登校児童・生徒の状況

対象は、ほとんど学校に登校できていない生徒である。特別支援委員会において、欠席が続いている生徒の状況を素早く把握し、校内適応教室へとつなげられるよう働きかけている。不登校のきっかけは、教室などの集団が苦手であることや、友人関係の悩みなど様々である。

### 具体的な取組

月に一度生徒アンケートを実施し、生徒の悩みや不安を打ち明ける機会を設けている。また、週に一度特別支援委員会を行い、生徒の登校状況や様子を共有している。委員会の記録を回覧することで、学校全体で共通認識を図っている。

これらの取組により、生徒の状況を継続的に把握し、支援の必要な生徒の早期発見につなげている。

校内適応教室に通室を開始する際に学校支援指導員との面談を行い、無理のない登校頻度を設定するようにしている。そのことで、生活や登校のリズムを保つことができている。決まった曜日に登校を続けることで習慣や自信が付き、次年度に登校頻度を増やすことにつながっている。

校内適応教室について、一日の過ごし方や出欠の扱い等詳細をまとめたプリントを作成し、生徒と保護者が共に見通しをもって通室を開始できるようにした。

校外の適応指導教室やフリースクールと比較することができるようになり、自分に適した学習形態を選択することで、主体的な学びにつながった。

校内適応教室では、学校支援指導員と連携し、学習指導や体力向上の活動を支援している。また、当番活動を通して役割を果たすことで、自己有用感や自己肯定感をもたせている。

教室にプリントを取りに行ったり、別室から行事を見学したりすることにより、友人との関わりをもつことができるようにした。



### 成果

登校の習慣を定着させ、生活リズムを整えることにより、進路指導までつなげることができた。また、校内適応教室内の仲間や教職員との関わりにより、少しずつコミュニケーションをとれるようになっていく。

### 課題

今後通室する人数が増えた際、教室の確保・学校支援指導員の増員が必要となる。